

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ビザンツ文学余滴 : プセロス「まだ幼い孫のために」
Author(s)	戸田, 聡
Citation	プロピレア , 22 : 85 - 95
Issue Date	2016-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041558
Right	Copyright (c) 2016 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ビザンツ文学余滴

——プロセロス「まだ幼い孫のために」——

戸田 聡

はじめに

ひよんなことから本誌『プロピレア』に拙稿を投稿することになった。

詳しい経緯を記すと、筆者は一昨年、二〇一四年三月末に、敬愛して已まないドイツ・ビザンツ学の泰斗ハンス＝ゲオルク・ベック（1910～1999）の主著 *Das byzantinische Jahrtausend* の日本語訳を上梓することができたのだが¹⁾、その際、文学関係でいくつかわからない点があり、近代ギリシア文学の（と言うよりむしろ、「近代」をとっぱらって——つまりは古代ギリシア文学や、中世ギリシア文学（これが本稿で「ビザンツ文学」と称するところのものである）を含めた形で——ギリシア文学一般の、と言うほうが適切かもしれない）専門研究者であられる橘孝司氏にご教示をお願いした。大いに裨益されたことはもとより言うまでもない。そしてその際に多少調べて、氏が編集の中心メンバーの一人としてかかわっておられる『プロピレア』という雑誌があることを知った。

雑誌の存在を知ってすぐに投稿を思い立ったわけではない。が、上記邦訳書との関連でベックという学者のビザンツ文学への思い入れの深さについて改めて思いを致す機会があり²⁾、加えて、極めて後ろ向きなことを述べれば、元来歴史研究者のはしくれと自らを位置づけているつもりだったがひよんなことから現在所属する北海道大学で「西洋文学講座」の「西洋古典文学」担当者と位置づけられた（そもそもそういう形で採用されたのである）ことに鑑みて、いつまでも自分の分野不適合を嘆くよりもむしろ、職責に見合った業績を産出するよう心がけるべきではないかとの考えをいだくに至り、それやこれやで投稿を思い立った次第である。などと書くとすぐさま、「ビザン

ツ文学」は果たして「西洋古典文学」の一部なのかどうか、という口さがない批判が飛んでくるかもしれないが（どこから？）³⁾、まあそのあたりは多少は幅を持たせて、ということで勘弁願うことに（勝手に）決めた。

欲を言えば、敬愛するベック氏は *Byzantinisches Lesebuch* という読本（ビザンツ関係の史料集）を編纂してもおり⁴⁾、そこには、氏が長い研究経歴の中で取り扱ってきた様々な文学作品が抄録されている。その日本語版に相当するものをそのうちに作れないものか、などという思いがないわけではない。しかし、この企画は所詮無理だと観念しておくべきだろう。というのも筆者自身は、ベックと異なり、特段立ち入ってビザンツ文学を研究したわけではないからである⁵⁾。そのような筆者がベックの猿真似をしてビザンツ文学の作品の抄録を作ったところで、所詮それは 似非而 読本以上のものになりはしない。

かくて読本づくりははなから諦めることにするが、但し、そういうわけで自らビザンツ文学の作品の森の中に分け入るすべを知らない筆者としては、何を選んで翻訳するかについて、やはり目利きのガイドに頼るほかない。ということで、基本的には *Jahrtausend* か *Lesebuch* でベックが選んだ作品を対象として、拙劣なる日本語訳を施して本誌に発表することを目指したく思っている。

この「はじめに」を終えるに当たり、本稿の題について一言。言うまでもなく、「余滴」とは本来、当該文学について酸いも甘いも噛み分けた玄人・達人がその豊穡な筆先から何らかついでに滴り落とす、そのようなものにこそふさわしい名前であって、筆者のような徒輩が使用するのは最も不相応だと言えよう。そこで、筆者としても、「ビザンツ文学エセ余滴（或いは余滴もどき）」と題するかと考えてもみたが、これだと何だか「ビザンツ文学」自体がエセないしまがい物であるようにも思えてきて（歴史上そういう評価もないではなかったのだろうが）、少々気の毒である。また、笑いを取りに行くための題としては少々エグすぎる気がする。ということで、以上縷々本稿投稿の由来を述べて、これがどれほどインチキなものであるかは今や明白だろうと思われるので、そのようなインチキ（或いは、皮肉、と言い換えてもよい——ビザンツ文学の玄人 *connaissanceur* だったベック氏は、皮肉を愛する教養人でもあった）を蔵した題であることが了解されるよう願う次第である。

翻訳序

初回に当たる今回は（などと勝手に連載を企図しているあたり、我ながら実に厚かましいことこの上ないが）、*Jahrtausend* の邦訳である『ビザンツ世界論』の中で既に訳出したことのあるミカエル・プセロスの文章をご覧に供したく思う。既訳の際にはベックのドイツ語訳に従ってごく一部を省いたが、本稿ではその部分も訳出したので、当該文章の全訳は今回が初めてだと言ってよいだろう。

著者ミカエル・プセロス（1018～1081 以後？）⁶⁾について、何がしか能書きを垂れるほどの知識を筆者は持ち合わせていないので、やはり『世界論』の中でベックがプセロスについて書いている内容（実にベックは何度もプセロスに言及している）をここでまとめて提示することによって、著者紹介に代えたい。

* * *

「或いはミカエル・プセロスが孫に宛てた小弁論 [これが本稿で訳出する小品] を思うがよい。ここに見られるのは、技術を達人的にこなし、しかしそれでも一応それをむきだしにせずを使いこなす「本物のプセロス」、倦むことなき自己評価とあらゆる野心を胸に秘めたプセロスである。ともあれ、見まがうべくもない真実として言えるのは、小さな子どもの創造的なナイーブさと、その不器用さのよるべない魔術と、そして有頂天になった祖父が孫の中に見いだしたつもりでいる個性の最初期のしるしとを、喜ぶプセロスの喜びようであり、他方、老齢の悲哀や、この子どもが歩むさらなる道のりに自分はもう長くは付き添ってやれないのだという、メランコリックな諦念と悲しみ、といったことも感得できる。つまり別離であり、さらに「フェアヴァイレ ドックホ とにかくとどまれ……」という絶望的な思いであり、さらにそれら全体を、同情を伴ったほのかな自嘲が覆っている。」（『世界論』、167-168 頁）

「マウロプスと親交を結び、だが彼と全く異なるのが、哲学者、博識家にして廷臣だったミカエル・プセロスである。彼の達人芸は再三自らを拉し去り、彼は再三、曲芸をそれ自体のために愛するが、他のいかなる作家とも同様、彼も時代に拘束されている。彼は好んで古物関連の知識をひっかけ回すが、いつも見事に才知に長けた仕方で、それらを十一世紀へと売り出す。彼の歴史書は、プロコピオスのような人の バトス 熱情からは遠く隔たり、機知的・逸話的なものを主体に構想されている。それは、彼自身の個性という多色のプリズムによって歪められた歴史である。彼が抒情詩的主調を知らないわけ

でない、ということは既に述べた。彼の諷刺文学は劣らず注目に値する。ここでは、ビザンツの司祭様はプセロスの司祭様であり、これを彼はたぐい稀な、機知に富んだ仕方料理する。〔中略〕私がより重要だと思うのは、書簡もまた時としてビザンツ人の活気ある文学の一部となっている、という指摘であり、これはプセロスを例に特に良く例証できる。無論、プセロスの場合でも往々、書簡は気どった書きつけ以外の何物でもないが、助けが必要な若い人々や窮地に陥った人々に彼が持たせた推薦状もしばしば見受けられる。どうもプセロスがこういう手紙で人をあまり待たせなかったということは、彼のために記しておいてよい。さもなければ、この種の書き物の途方もない多さは説明不能だろう。だが、書簡の中で彼は再三、我々に同時代人の日常への深い洞察を可能にする語り手にもなっている。かくて彼は例えば、何でも知り屋の来訪を語っている。〔中略〕プセロスの書簡の中には、同時代の修道制を玉虫色の光の中に登場させるものもいくつかあり、そして多くの書簡で彼は修道士身分の代表者たちを叱りつける——こういうことは「^{オルトドクス}正教的な」ビザンツ人からはふつう望めないだろう。最後に彼自身、短い間（ビテュニアの）聖山オリュンポスで修道士だった。だが修道士たちは、彼のこの寄り道に対して適切に報いることを怠らなかった。〔中略〕

なお、脚注風に述べると、たぶんプセロスは同時代の民衆的語法に取り組んだ最初の学者の一人だろう——古典主義を越えた言語的関心を示す、これは一つのしるしである。」（同、191-193頁）

「ミカエル・プセロスの一論考は、異端化した悪霊信仰に関するさらなる史料のように見える。これは一箇の対話篇で、その中ではティモテオスなる者がトラキアにおける悪魔祭祀について伝えている。プセロスは極めて物知りであり、これまでの研究はさほど困難なしに、ほぼ例外なく彼の情報をより古い著作のうちに突き止めることができた。これはそれ自体では、十一世紀の状況に関するこの報告から史的現実性が剥奪されるべきだ、ということをも未だ意味しない。だが、史的現実性ということ言えば、それでも私は、プセロスのこの論考が「ビザンツ人の信仰」という主題のために注目されるべきだ、とは思わない。私見によればこの論考はたぶん、様々な性的倒錯——これが、サタン的人物を引き合いに出すことで擬似宗教的な後光を獲得し、当の倒錯は再三そういう後光によって、自らを装おうとしているのである——に対する文化史的な好事探求（これは、我々の世紀〔すなわち二十世紀〕に至るまでたどることができる）の一例でしかないだろう。」（同、415頁）

「ビザンツにおける悪魔・悪霊観」の項で)

「この時代 [すなわち十一世紀] の精神的状況をぴったり表しているのは、この宮廷サークルの一人、哲学者・歴史家にして博識の士ミカエル・プセロスである。だが、まさに彼の場合に、再び拡大された帝国の生活圏がもはや四～六世紀の質を有しなかったことが明白となる。帝国自体の中でも、そして——これが特に重要だと私には思えるが——その境界地域でも、コンスタンティノーブルと再び競合してビザンツ人の自信に対して挑戦状を突きつけることができる、そういう精神的中心が見当たらないのである。精神的にはビザンツ世界は、コンスタンティノーブルにおいて固化した状況の中で、拡大にもかかわらず自分自身へと引き戻された状態にあり続けた。[中略] プセロスはスケールが異なる。彼のもとでは無論、彼の後継者ヨアンネス・イタロスのもとでと同様、古代はそれ以前の数世紀におけるよりも生き生きとしている。しかしながら、その場合念頭に浮かぶのは、神話という言葉ではなく、プラトン主義的・新プラトン主義的な理念の^{ルネサンス}再生という呼称である。ほどなく教会との衝突も生じたが、それはもはや「ヘレニズム」といった一般的な非難の形では表現されず、哲学的ディテールに入り込んでいる。より合理的になったのである。その他の点では、時代の変化は、プセロスと歴史家プロコピオスを比較する場合にたぶん最も良くわかるだろう。社会的前提条件に関しては、[二人の間には] 言及に値する相違はないように私には思える。生まれから見てプセロスが支配階層に属さなかったことは確からしいが、プロコピオスの場合についても、彼が元老院議員の家柄の出だということが立証可能だとは私は思わない。既に何度も繰り返して述べているように、彼がこの[元老院議員]階級の野心と自らを一体化させていることは、何ら証拠にならない。彼と同様、プセロスは自分の野望を隠さない。彼は昇進を成し遂げ、昨日までの自分を嬉々として忘れる。二人とも教養人だが、プロコピオスの教養のほうがプセロスのよりも一段と「現実主義的」である。プロコピオスが形式的なものに疎かったのではなく、プセロスの場合と同様、彼の場合にもその点で強調の必要はないが、やはり決定的なのは、歴史における(より大きな構造的連関という意味での)「具体的なもの」への、さらに探求と発見への、プロコピオスの関心である。そして彼のこの教養は、史的著作に有機的に組み込まれる、完全に自然な所有物である。この教養は彼をして、史的秤量を行なわせ、帝国であれその敵であれ正しく評価させることを可能にしており、その行き着く先は、伸びやかな筆致、それとともに一

—少なくとも『戦史』の大部分については——、史的に見て規定的でなくあまりにも些末な個人主義的ディテールを健全にも捨象すること〔という、彼のやり方〕である。これに対して、プセロスは点描画家である。彼がいる世界は、なお非常に巨大かつ広大になったかもしれないが、彼はこの広大さを捉えず、それによって捉えられることもない。少なくとも帝国意識は、遠方の属州さらには国境地帯が彼の〔描く〕歴史の活気ある構成要素を成すのだという意味では、〔プセロスの場合では〕あまり現前としていない。彼にとっては帝国と宮廷が一致している、とほとんど言いたいところである。この狭さの中でのみ、彼は自分が泰然自若としていると感じる。ケカウメノスのように「属州に出て来て、そこで何が起きているか、とくと見よ！」と皇帝たちに呼びかけるなどとは、プセロスには思いつかないだろう。皇帝たちは宮廷にとどまっているほうが良い、なぜならプセロスは、自分の周囲に彼らを必要とするからである。彼にとって皇帝たちとは、まず第一に宮廷生活の、及び宮廷での陰謀の、上がり下がりにおける関係者なのである。ここで塩味と皮肉を利かせて距離を取っているふりをするのが、彼はとりわけ上手である——プロコピオスよりも上手であり、なぜなら彼はより優れた心理学者だからである。彼の古典教養は同時代人たちの低レベルから誇らしげにきわだっており、それゆえ彼はそれを装飾手段として豊富に使っている。それらは史的著作の中に有機的に流れ込むものではない。プロコピオスは歴史を書き、プセロスは史的人物の肖像を描いている。たぶん後者はこの点でかくも見事に成功したのであり——この点での疑念はありえない——、なぜなら個人は次第に古代的類型から離脱しつつあったからである。いずれにせよ、歴史という偉大な作品はプセロスにとって重要でない。彼は手のひら大の肖像を描くのであり、その際、新たなものの大規模な供給ということに彼は真に気づいていない。このことは無条件で彼の罪というわけでは必ずしもない。

〔中略〕かくて十一世紀は、帝国のアルキュオネー的な平穏な日々に属し、そしてコムネノス朝時代の栄光は、そもそもこの栄光自体が現実というよりむしろ見せかけによって生きているのと同様、この時代の直線的な継続とは言えない。」（同、469-472頁）

* * *

翻訳の底本としたのは A.R. LITTLEWOOD (ed.), *Michaelis Pselli oratoria minora* (Bibliotheca scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana), Leipzig: Teubner, 1985, pp. 152-155 (orat. no. 38) である。『世界論』における訳出の時に使用した底本である E. KURTZ & F. DREXL (eds.), *Michaelis Pselli scripta minora*, vol. 1: *Orationes et dissertationes*, Milano: Vita e Pensiero, 1936, pp. 77-81 とほぼ同じ本文だが、十に満たない数の箇所で見方が変わっており（推測による変更を含む）、今回の全訳に当たり底本に合わせて訳し変えた。

* * *

まだ幼い孫のために

ミカエル・プセロス

我が最も愛する ^{あかご}赤子、我が魂の孫よ。たぶん私は、神がお望みになっても、お前が大人になるのも若者になるのも目にしないだろう。というのも、私にとって、生きることはもはや残りかすであり、紡ぎ糸の端を持ち上げる時が来たから。このゆえに私は、お前のために言葉を先どりしよう、そして、お前の生まれ持った優美さに言葉の優美さで報いることにしよう。お前が感覚においても理解力においても未完成であって、私にとってのみこれらの点で完成されており、そしてお前が、私の声と愛情を感じ取り、私の首に巻きつき、私の曲げた腕の下に入り込み、[私が] 接吻でお前を悩ますのを耐えている、そのような状況下において、もし私が、すなわち、他の諸々の点においても言葉の産出においても富める者であるこの私が、お前に対してふさわしい応答を欠いているなら、私は全く無知にして無思慮であるだろう。

このゆえに私は、お前がいつか書き物を読んで、お前の人生にとって祖父がどういうものだったか、そしてどのような「舌の衣」を持っていたかを知ることができるよう、賞賛演説のように以下の言葉を語ろう。外から偽りを持ち来たるのではなく、讃辞を行なうのでもなく、むしろ、私が他の赤ん坊の中に観察できなかったような、お前のそういう性格を描き出すことで、私はお前を讃えよう。実際、他に誰があろうとも、私は識別にかけて、また、[ひらいた] 窓のように感覚を通じて魂へと探りを入れることにかけて ^た長け

ており、否むしろ、両眉と両目の中に位置を占める魂の理解にかけて、長けているのだから。

さて、折良く私は身体のこれらの部分に言及したので、生まれたばかりのお前の目は、本当に親しみやすいものに〔私の目には〕映った。いかめしくもなく落ち着きを欠くのもなく、物憂げでもものぐさそうでもなく——これは鈍い性格のしるしである——、むしろ沈思の中にあるかのように止まっており、はたまた、笑いがさっと訪れそうな時には明朗に動くのだ。私自身一度、このようなことを、三つ足の大釜やバックス的興奮によってでなくお前の両目の親しみやすい状態自体から察知して、お前はすぐに笑い出すぞと予言したことがある。そしてすぐに、お前は小さな唇の色を変え、満面真っ赤になって笑いを生み出した。また、目の沈思の中にあって眉は無為でなく、むしろそれはかすかに動き、知性のいくばくかを分与することによって、えも言われぬ性格の片鱗を露わにしていた。

泣くというようなことに対してお前は反対であり、お前に対して乳の泉がせきとめられて、乳母がいつもの飲み物をお前から取り上げた時にも、お前は泣き叫び出して身震いすることがなく、むしろ、彼女がお前にいかめしい顔を見せた時には、お前は言い争って、不正と暴虐のかどで彼女を告発しているように見えた。また、見物人や裁き手を自分の意向の側へと引き寄せるために、お前は多少の涙を流し、かつ舌と両目を使って、裁き手たちの評決を自分の側へと傾けるようにしていた。そして、不正義を行なったかの^{おんな}女がお前に対して乳房を露わにした時には、お前は道理のわかった者のように速やかに考えを改め、暴君としてふるまった女をより穏やかな仕方で見たのだった。そして泉に取りついても、お前は、渴きを覚える者たちのようにむさぼって乳の流れにしがみつ়くことはせず、むしろ、ほどほどの報酬である限りのものを飲み、すぐに、養いを与えた女に対して親しみやすいまなざしと笑いを向けていた。お前にとって、方針に反することは自ら選び取られた法であり、馬鹿げたことは理性的な随従だったのだ。実際、大勢であった人々にとって、魂は即座に、より一層愚かなものとして取り扱われ、他方で、より一層名誉を愛する本性を神によって内に据えつけられた人々にとっては、魂は、この本性を通じて霊を輝かせるのだ——高く輝く燭台〔マタイ 5. 15 を参照〕を通じて、それが光を、遠くまで輝くものとして示すのと同様に。〔お前の〕産みの母親についてこういったことが、祖父たる私に告げられていた。そして新奇なことは何もない——もしお前が、流れ出た同じ泉から、言

わばその流れのごとき、産んだ者〔母親〕の本性の何がしかの分を、もぎとったのであれば。

このゆえに、お前の場合には、他の諸々〔の特徴〕も赤ん坊的でなく、むしろ、そのような年代よりも遥かに賢いものだった。すなわち、歳にして四か月目がまだ終わっていなかった頃、お前の周囲の者たちの特徴が、明確な仕方でお前の魂に刻印されつつあった。男であれ女であれ、お前は各々を知っていた。そして誰がお前を全く無視し、誰が世話を焼いているかを、お前は理解しているかのごとくで、お前はなついてみせたり、はねのけてみせたりしていたのだ。私のためだけには、お前は自分の法をはねのけ、〔私が〕優しくかつ抑えがたく接吻し、お前の唇をさすってなで、かつお前をより男らしく抱擁するのを、お前は見ていた。そして右手を叩く私に、お前は、主の法を充足するかのごとくに〔マタイ 5. 39 を参照〕、左手をも差し出した。打撃が善意から来ているということ、そして叩く者〔すなわち私〕が、叩くためにでなく、むしろ、お前の本性と優美さをあらゆる仕方で味わうべくこうしているのだということ、たぶんお前は知っていたのだろう。そして私自身、お前が困惑しているのを見たなら、お前の幼児的な遊びを直ちにやめて、手で軽くしてお前を空中に持ち上げ、お前の喜びのあらゆる升目を満たすようにしただろう。

他の赤ん坊がどうあれ、お前はおむつを我慢できず、そして乳母がお前を壺〔の水？〕で洗い流して、おむつをつけ、手をそれぞれわきへと伸ばして両足を置いて〔おむつで〕まとめようとする時、お前は直ちにだんまりし、ふくれてみせた。そして、獄に入れられた状況でご馳走を食べたいと思わない者のように、他の何物も、お前を魅惑することができないのだった。縄目を解かれ、おむつを脱いだ時、お前は何が起こったかわからず、目は一層喜びを湛え、より楽しそうに笑い、あらゆる仕方で両手を動かし、両足をバタバタさせ、言わば熱心さによって羽根がついたような、そして空へと持ち上げられているような様子だった。そしてお前は、より高貴に世の快樂を感じ取り、そして母親がお前の頭を飾り、或いは一層きらびやかな衣を着せた時には、お前は、転げ回るように、また同時になよなよしたように、そして服を誇るように、あえいで見せたものだった。

入浴の恵みを、お前は赤ん坊のように受け入れたのではなく、むしろ、より理性的にそれに愛着していた。そこで私自身は、自分が入浴したいのではなく、お前自身が入浴を楽しむよう、そして私がお前の元気さと優美さを楽

しむよう、しばしば風呂場に行き、お前と一緒に子どもになり、お前と一緒に風呂桶に浸かったものだった。一方でお前は楽しみ、他方で、より熱くなった容器〔である風呂桶〕から逃れようとして、私に巻きつき、しっかりとくっつきぴったり固着して、自分流の言葉を言うべく舌を使い、しかし何も〔意味あることを？〕言うてはおらず、私にも、お前の言うことはわからないのだ。

また、お前のからだ（悪意の視線がお前に向かわないように！）は抱きかかえやすく、四肢によって調和させられており、本当に自然の聖なる献げ物だ。また、髪はふさふさで金色で、頭は諸々の形の中の最も正確なものを保っており、首はすらりとして、他の諸々のものは（一つ一つ言わないことにすると）、自然本性から見て最も良く調和している。

ああ、人生のすべての時がお前にとって幸運なものであるなら！　だが私は、このことをあまりに強く断言はするまい。その出だしは、幸いなものだ。というのも、皇帝と皇妃が、お前の洗礼後の抱きかかえについて言い争ったのだから。そして女の性が勝った。そしてお前は宮廷の中の者となり、彼女はお前を強く抱きしめ、それが終わると、首のあたりを持ち上げ、重荷を担うかのように、お前を皇帝の極めて柔らかい寝床に置いた。そしてまた、彼女はお前を母親に返し、その時にお前が身に着けていた飾りをも、同時に与えたのだった。加えて、生まれよりは劣るが年代よりは大きな皇帝的尊称も、付与されたのだった。

これが、祖父からお前への、未完成な者について創作された未完成な賞賛演説だ。私にとって、お前は生ける真珠であり、我が魂の飾りである。お前が思慮する年齢に達して、お前の祖父がどういう者か、お前の人生の最初の実りがどのようなものかを知ったなら、模範に従って自分自身を形づくり、性格を自制心の方へと鍛錬し、両親を敬い、教育係と教師を敬い、そして何よりも、言論によって自分の魂を美しくしなさい。なぜならこの点で、私もまたお前の母と一族とを整えたのだから。そしてお前が、欲する限りのものを得るように、否むしろ、教育と賢さを得るように。それらこそ、そしてそれらだけが、魂を固有の美へと導き、また、えも言われぬ様々なものに対する理解力を作り上げるのだ。私はお前のためにこれらを書いた——お前を腕に抱え、そして飽きることなく接吻しながら。

注

- 1) H・ーG・ベック／戸田 聡訳『ビザンツ世界論—ビザンツの千年—』、知泉書館、2014年。
- 2) 戸田 聡「『ビザンツ世界論』に見るH・ーG・ベックのビザンツ理解をめぐって」、『エイコーン—東方キリスト教研究』46（2015 [2016] ）、3-18頁。
- 3) 因みにベック自身によれば、従来ビザンツ文学は、当の文学作品が完成した（つまり新品の）時点から中古品文学とみなされる、そういう代物だった由。前掲拙稿、17頁註26を参照。
- 4) Hans-Georg BECK (hrsg.), *Byzantinisches Lesebuch*, München: C.H. Beck, 1982.
- 5) ベック自身に言わせると、ビザンツ文学について何か語りうるためには十年の専一的な研究が必要だとのことである。「ビザンツ文学の場合、十年間もそれと取組んだ末にはじめて、おそらくその真価が開示されるであろう」（H. G. ベック／渡辺金一編訳『ビザンツ世界の思考構造—文学創造の根底にあるもの—』、岩波書店、1978年、86-87頁）。
- 6) 生没年は *The Oxford Dictionary of Byzantium*, s.v. “Psellos, Michael” (by A. Kazhdan), vol. 3, New York & Oxford: Oxford University Press, 1991, p. 1754 に拠った。